子どものきもの（第3報）

女児服のあきと留具に関する実態調査

荻野千鶴子・滝川順子・大島厚子

The children's wears (Part 3)

The research on the actual condition of the little girls' clothes about openings and fasteners, snaps, buttons and other closing implements

by

C. OGINO, J. TAKIKAWA and A. OSHIMA

緒 言

第1報では, 衣生活のしつけの立場から女児服の実態調査を行なったが, 第3報では, 服種の実態調査と同時に, しつけの立場を更に深めて, 年令別服種のあきと留具の違いによる脱ぎ着への影響を調べた。

更に, 脱ぎ着の重要性である留具のかけはすしに着替え, 其の実際的な様子および傾向を知る目的で, 留具の実態を基にして前あきの服を作製し, これに数種のスナップ・ボタンをつけた。そして, その服を着用させかけはすしの順序および所要時間について予備的実験を試みたので, その結果を報告する。

女児服のあきおよび留具と脱ぎ着に関する家庭実態調査について

1. 調査対象
名古屋市およびその周辺における2才〜5才の女児の家庭

2. 時期
昭和41年11月〜42年4月

3. 方法
冬・合服を対象として, 特にしつけに関係があると考えられる, あきの位置と留具の種類の実態, 更に, それらの違いによる脱ぎ着への影響と同時に各年令との関係を知る目的で, 所持服を調査した。調査形式は, 本学学生・並びに幼稚園・保育園の各一か所の園児を通じて調査用紙1010枚を配布し, 母親の記入によるものを回収した。有効回答数は83.8%であった。

4. 結果および考察

Ⅰ. 服種の実態
今回は, 所持服の対象を調査時期と同一の冬・合服とした。その結果（表1）, 最も多い服種は, ブラウスが全体の31.4%, 次いでワンピース24.1%, スカート21.5%, ジャン
<table>
<thead>
<tr>
<th>年 齢</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ワン  ピース</td>
<td>27.33</td>
<td>22.97</td>
<td>25.42</td>
<td>23.34</td>
<td>24.12</td>
</tr>
<tr>
<td>プラ  ウス</td>
<td>28.57</td>
<td>30.27</td>
<td>32.07</td>
<td>32.12</td>
<td>31.39</td>
</tr>
<tr>
<td>ス  カ  ート</td>
<td>16.15</td>
<td>22.16</td>
<td>19.24</td>
<td>23.46</td>
<td>21.50</td>
</tr>
<tr>
<td>ジャン  パースシート</td>
<td>16.77</td>
<td>18.65</td>
<td>17.10</td>
<td>15.17</td>
<td>16.52</td>
</tr>
<tr>
<td>そ の 他</td>
<td>11.18</td>
<td>5.95</td>
<td>6.17</td>
<td>5.91</td>
<td>6.46</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表1 年令別服種の実態
単位は％

バースカート16.5％。その他、6.5％の順で、その他の服種としては、セーター、カーディガン、スモック、ベストなどがあげられる。これらを年齢別に見ると、各年齢ともブラウスが最も多く、5才を除き他は、上述と同傾向であった。いずれの年齢にもブラウスが多いのは、この幼児期の発達の特徴として身体発育の旺盛な時期にあたるのので、着丈の調整ができる組み合わせ形式が好まれたのではないかと考えられる。更に、組み合わせ形式のブラウスとスカートは、気温によって、容易に調節が可。又、子供の生活が遊び中心である点からも汚すことが多く、洗濯も容易で、いたみのひどい部分は補修したりするにかかわらず、上下を分けて管理できることは、非常に合理的で好ましい傾向と言えよう。

しかし、2才は、ワンピースとブラウスの傾向がほぼ同程度を示しているが、この時期は步行も可能になるとで縁丈の短かい。しかも、脱ぎ着が簡単で歩行の障害になりやすいリリした着付といたため、比較的それらの条件に合った服種としてワンピースの愛用者が多いと考えられる。

ロ、年令別脱ぎ着の可否

脱ぎ着が、幼児1人でできるか否かということは、服を体に纏ったり、脱いだりする動作のみでなく、むしろその難易はその過程として行われる留具のかけ方とそれに影響されることが大きいと考えられる。これに重点をおいての結果をみるとした。先ず、1人で脱ぎ着できる者を可、できない者を否、着る・脱くの一方のみできるものを各々の可として、4種類に分けた。その結果（図1）2才ではお手伝いなしに完全に1人で脱ぎ着できる者は、6.2％で全くできない者が半数以上の65.2％であった。又、脱くことのみできる者は、着ることのみできる者の約5倍の23.6％であった。これは、着るより脱くことの方がかんやすい結果の現われであると考えられる。この点については、山下氏、平井氏並びにハーロック氏も指摘している。更に、3才では、脱ぎ着のできる者は23.7％で2才の場合に比べその変化は急激である。又全く不可能な者が、2才の場合の約9％にあたる39.0％となり、4才では、脱ぎ着のできる者は、40.7％、5才では、46.4％と、年齢の増す毎に、徐々に増加し、約半数に達するが第1報の報告では、4・5
才になると殆んどの者ができるようになった結果からみて冬服より、夏・秋服の方が着やすいと考えられる。更に、脱ぎ着の習慣は、多くの場合、母親のしつけに対する考え方が反映されると思われるが、2才頃からは何でも自分でやろうとする気持ちが盛んとなり、更に子供の自立心も盛んになってくるので、衣生活においてもこれを正しく育ててゆける心がまえが必要であろう。脱ぐことのできる点では、2才も5才もほとんど変わりなかった。この結果については、解答する母親の充分な理解がなされていたかどうか困難に思われる。

八、各服種の年令用途別着脱の関連

服種が脱ぎ着の可否に及ぼす影響もあると考えられるので、利用度の比較的多いワンピース、ブラウス、スカート、ジャンパースカートを日常着、外出着に区別しそれぞれの脱ぎ着の状態の結果は、次の様である（図2）。

各年令とも、最も脱ぎ着の困難な服種はワンピースであり、2才で約80～90％、5才では、約43％の高率を示す。次いで困難であるのは、ジャンパースカートである。反対に比較的容易な服種は、ブラウス及びスカートである。ブラウスの場合は、脱ぎ着のできない者が、2才が52.1％であるが、5才ではわずかに0.5％になり、その差は非常に大きく、できない者は殆どなくなっている。又反対に、できる者が2才が8.0％、5才が64.2％と上昇しているが、この傾向は結果的に同じである。更に、用途別にみると、日常着と外出着として年令の進むに従って、各服種とも日常着は脱ぎ着の可能者が増加しているのに反し、外出着においては、脱ぎ着の不可能な者が比較的多い、特に、それはワンピースにおいて顕著である。これは、外出着の特徴と考えられる装飾やデザイン上傾ったものが多いため、脱ぎ着がしにくくなるばかりでなく装飾の持味を生かすために規制されたあき・留具の位置や着具名などの原因していると考えられる。この点については、平井氏も述べているように、3～4才になると、著しく変化し、それに伴って、はっきりした要求が明らかとなり、女の子としての主張や頭脳を育てるのには、満足のゆくよう配慮された装飾的な服装をも合わせて検討してゆく必要がある。また、「脱ぐのみ」のできる頗著な服種はスカートである。これは、他の服種と構成上大きな相違があるか、容易に着から着ることができ、年令の少ない者でも比較的簡単に着られるからである。

ニ、服種とあきの種類

服脱着の可否は、服種とそれらの服を構成する要素であるあきにも関連するので、あきの種類と服種についてみると（図3）。ワンピースでは、後あきが59.8％で最も多く、前あきは、後あきの約2倍であった。この結果は第1報で報告した夏・秋服の既製服の実態調査の結果におけるワンピースでは、後あきが72.0％で圧倒的に多かった事と同じ傾向を示し
ている。又、ブラウスでは前あきが86.0%で高率を示した。また、ジャンパースカートもワンピースと同じく、後あきが43.3%で最も多かった。

図3 服種とあきの種類

次に、あきの位置と留具の種類が脱ぎ着の重要な要素になると考え、これを調べた結果（図4）。ワンピースでは、ファスナーが49.4%で最も多く、次にボタン23.8%、スナップ16.2%の順となり、これは第1報の結果と同傾向である。ブラウスでは、スナップが59.3%で最も多く、次いでボタンの32.5%でファスナーは、6.0%でごくわずかである。ジャンパースカートでは、ワンピースと同様な傾向でファスナー44.0%で最も多く、ボタン26.0%、スナップ22.4%でほぼ同率の傾向である。

図4 服種と留具の種類

以上の傾向は、あきの場合と同様、服の装飾性と大いに関係していると考えられるので、今日言われている装飾過度現象の下では、ユニホームなどの特殊な衣服を除いて、一般の外出着・日常着など季節的な差異は少ないと思われる。

図5 留具の種類と脱ぎ着の関連

年令別留具の種類と脱ぎ着の関連の結果については（図5）。まず、ワンピースでは、留具の種類として最も多かったファスナーは、脱ぎ着の不可能な者が2才で91.7%とその大部分を占めるが、5才になると67.8%に減少している。更にボタンにおいては、2才は全く不可能であるが、年令の
進む每に、3才有71.4%、4才有23.7%で、5才有17.4%にまで減少し、フッサナーの場合と同傾向であるが、その割合は非常に少なくなっている。更に、3・4才有の変化が急激であるが、他の留具において、ボタンは指先の巧緻性が関係しているものと考えられる。スナップでは、2才有57.1%、5才有12.5%と減少してボタンより、はるかに少ない結果を示している。またブラウスでは、ボタンは2才有不可能者80.0%が5才有になると38.5%まで減少し、ワンピースに比較してその減少率が大きくになっている。これは、後あきの多かったワンピースに反して、ブラウスは前あきが多かった結果と考えられる。

以上、3種の留具の中で各服種とも最もかけはきずの困難な留具は、フッサナーであっただが、この理由として、フッサナーの用いられる場合のあきの位置が後あきであった点があげられる。又、フッサナーのあげおろしには、他の留具より多少力が必要することや、下着の一部がくいこみやすいことや、薄地の材質などでは容易に移動させにくいことなど、他の留具と異なる困難性を指摘することができるとと思われる。更に、年令的な傾向については、3・4才有の変化が顕著であった。

専用の間隔

留具の種類が脱ぎ着に及ぼす影響についてみたが、留具を取り上げた場合、必然的に着丈の伴う留具の間隔及び材質・デザインに応じた穴の方向及び斜めが問題になるが、脱ぎ着に関連があると考えられるスナップ・ボタンについての間隔の完成程度について調べた（図6）。間隔は、年令の増加毎に着丈が増す傾向にあるが、スナップについては、2才有4cm及び7～8cmが共に32%、3才有5～6cmが42%、4才有6～8cmで38%、5才有7～8cmが35%とほぼ着丈に準じた間隔である。又、ボタンについても、スナップの場合とはほぼ同様な傾向を示した。

スナップ・ボタンによるかけはきずの予備的実験について

以上の家庭調査の結果、脱ぎ着は服種によるあき及び留具に関係のあることが明らかになったので、この結果を更に追求したために脱ぎ着におけるかけはきずの予備的実験を試みた。

1. 実験対象
　名古屋市内A幼稚園の3才～5才の男女児63名。

2. 時期
　昭和42年4月～5月

3. 方法
　実験着として木綿・テトロン混紡のギンガムにて、それぞれ年令の標準寸法によるドレメ式原型を用いて前打ち合わせの上衣を作製した。留具は（表2）に示すように各々直径・厚さの異なるスナップ3種、半球型ねりボタン2種、および円形平型ねりボタン2種の計7種類
のものをそれぞれ4個ずつつけた。またボタン穴は横穴かぶりにした。これらの上衣を各園児に着用させ、1種類の留具について「かける」「はずす」を各々3回ずつ7種類のものについて行い、時間の測定をするとともに順序などについて観察記録した。4. 結果および考察

イ. かけはずしの順序と方法

かけはずしの順序としては、「上から下へ行なう」、「下から上に行なう」、「順序不同で中途中止から行なう」の3種に分けて観察した。（図7）年令別・留具別に、「はずす」場合についてみると、3才では「上から下へ行なう者」が約40〜50%、「下から上へ行なう者」40〜60%で比較的にその差は少ないが、4・5才では留具の種類によって、「上から行

はずす は あ る。
「うな者」と「下から行なう者」の差が著しい。これは3才では、留具をあつかいなれていないために、最初行った方法を変えることが少なく、友だちのを真似たり、あるいは母親に教えられたそのままの方法で行うためであると思われる。また反面5才になれば留具の大小、形の相違によるつまみにくさなどを克服するために、つまみ方や順序を変えたりする創意など知的発達の程度が観察され、これが差を大きくした原因とも考えられる。また更にスナップでは、「下からはずす者」が50〜87％の数を示したが、これはみごろを両手でつかんで引張ってはずす者が多かった結果であると思われる。次にはめる場合では、年令とともに「上下」がほぼ60％以上の高率を示し、4・5では3才にくらべて「下から」が減少しているがこれは習慣化の傾向のあらわれであると考えられる。

つぎに「かけはずし」の方法を、「引張って行なう」「手さくりで行なう」「見で行なう」の3種類に分けて観察すると、はずす場合、スナップでは「引張ってする」が88％で圧倒的に多く、次に「見で行なう」9.3％、「手さくり」は6.3％であった。スナップの場合は強く引張ればはずれるので、比較的年令の少ない子供にこの方法が多く見られた。なおボタンでは「見で行なう」が各年令とも70％以上の高率を示している。

次にはめる場合には、「見で行なう」が圧倒的に多く、スナップ69％、ボタン79％であり、この反面、困難であると思われる「手さくりで行なう」は、スナップ24％、ボタン21％であり、予想以上に多かったがこの傾向は5才にのみみられていた。ロ・かけはずし要する時間

次に所要時間（表3）では、かえるの場合は、留具の種類別にみてみると、スナップでは、はずす場合5〜8秒で大きいが、5才ではスナップの方が速いが5秒では全く逆の現象が見られている。これは指先のサイズの大小や巧敵性とも関連する点ではないかと考えられる。

半球のボタンでは、はず場合小さい方が速いが、これは引張ればはずし易い事の影響ではないかと思われる。またはめる場合では反対に大きい方が速くなっている。これははめる時に、幼児はボタンを指先でつまみ1つ1つ穴に入れこむので、大きい方がつまみ易いためであると考えられる。更に平型ボタンでは、はずす場合は、ほぼ半球ボタンと同様に

<table>
<thead>
<tr>
<th>年令</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3</td>
<td>7.7</td>
<td>8.2</td>
<td>4.4</td>
<td>14.9</td>
<td>34.8</td>
<td>34.9</td>
<td>34.5</td>
<td>44.5</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>7.7</td>
<td>4.3</td>
<td>4.8</td>
<td>17.5</td>
<td>25.6</td>
<td>27.2</td>
<td>17.5</td>
<td>21.5</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>5.7</td>
<td>8.2</td>
<td>4.6</td>
<td>17.5</td>
<td>15.1</td>
<td>28.8</td>
<td>18.3</td>
<td>22.9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>年令</th>
<th>1</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3</td>
<td>54.8</td>
<td>85.9</td>
<td>93.2</td>
<td>66.6</td>
<td>63.7</td>
<td>82.7</td>
<td>78.3</td>
<td>60.0</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>41.2</td>
<td>37.6</td>
<td>53.4</td>
<td>56.8</td>
<td>55.0</td>
<td>35.2</td>
<td>48.2</td>
<td>46.7</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>32.8</td>
<td>26.1</td>
<td>23.1</td>
<td>44.3</td>
<td>34.4</td>
<td>49.9</td>
<td>34.0</td>
<td>32.7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表3 かけはずしの所要時間 単位秒
小さい方が速く、はめる場合も同様大きい方が速くなっている。
さらにスナップとボタンを比較すると、スナップの方が速くなっているがこれは、前に
も述べたように引張ってはずした結果である。また、半球と平型のボタンでは、はずす場
合は平型より半球ボタンの方がやや速いか、はめる場合は反対に平型ボタンが速く、この傾
向は特に大きい場合に顕著に現われた。

IV 総 括

アンケート用紙による家庭調査の結果について。
1. 幼児が多く着用している冬・合服のうち、しっけの上で脱ぎ着の可否に関連の深いもの
   は、ワンピース・ブラウス・スカート・ジャンパースカートの4種であった。
2. 一人で着られないものは、各年令を通じてワンピースが最も多く、これはその殆どが
   後あきで、留具はファスナーが最も多く、ついでボタンであった。
3. 最も着やすい服はブラウスで、これはその殆どが前あきでスナップであった。
次に「かけはずし」の実験結果は、
1. スナップは「かけはずし」という、ボタンよりたやすく速くできる。
2. 半球のボタンは、すべき易いため、「はずす」のは容易であるが、小さいものは非常に
   つまみにくく、ボタンとしては、平らなもので直径1.5cm位のものがとめ易い傾向であっ
   た。
3. 「かけはずし」の可否については、2才は殆どどの者が不可能な状態であるが、3才に
   なると急激に可能性が増しやすくなる傾向であり、5才になると、できる者とできない者の差
   がその手つきなどにも顕著に現われていた。
4. 2才児の留具としては、ボタンよりスナップの方が適していると考えられるが、この場
   合小さすぎると扱いにくく、反対に大きすぎると力を関係でとめにくいので、大きさに留
   意する必要がある。

以上、かけはずしによる幼児の実態について予備的実験を試みたが、かけはずしの難易は、
留具の種類、服地の材質、ボタンホールの方法、開用および打合せ方などにも左右されると考
えられるので、今後その方面の実証を試みたいと思う。

最後に、この実験に御協力を賜りました東京家政大学教授、山下倉員先生に厚く謝意を表し
ますとともに、調査および実験に御協力下さいました幼稚園・保育園の皆様や本学学生の方々
に深く感謝します。

参考文献

1) 山下倉則 (1959) 改訂幼児心理学
2) 中西廣 (1959) 幼児心理学
3) 平井信義 (1960) ママの手帳
4) 大伴茂 (1960) 実験児童心理学
5) 堂上武子 (1966) 乳幼児の心理としつけ、家庭科教育
6) 萩野千鶴子 (1967) 子どものきもの（第1巻）女児服に関する実態調査、名古屋女子大學紀要、13
7) Elizabeth B. Hurlock 松原達哉、牛島めぐみ訳 (1968) 子供の発達と育児
8) 石田恒好編 (1968) 発達心理学